

「スーパーボランティア」



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

2018年8月、山口県に住んでいる2歳の男の子が、突然いなくなった。

男の子は、おじいさんと一緒に家の近くの海に出かけた。しかし男の子は、海に行く途中で家に帰ると言い出した。そして、一人で家に戻っているときに、いなくなってしまった。

家族や150人以上の警察がいろいろな場所を探したが、男の子は見つからなかった。

男の子がいなくなって3日後の朝、一人のボランティアが捜索に参加した。

その人は、尾島春男さん。78歳。尾島さんは、朝早くから一人で男の子を探し始めた。そして30分後、なんと尾島さんは男の子を見つけたのだ。

警察や家族は、男の子がいなくなってからずっと、家から海の方を探していた。しかし尾島さんは、海とは反対の、山の方を探した。そして、男の子を見つけた。

「子どもは、どんどん山に登りたがる。だから、山を探した」

と、尾島さんは言った。

男の子がいなくなってから3日も経っていたのに、男の子は無事だった。奇跡だった。

尾島さんは、新聞で男の子のニュースを読んで、大分県の自分の家から車で駆けつけた。実は尾島さんは、東日本大震災の時も、熊本地震の時も、西日本豪雨の時も、ボランティアに参加した。赤いタオルを頭に巻いたスーパーボランティアだ。65歳まで大分県の別府市で魚屋をしていたが、65歳の誕生日にす

つぱり^{しごと}仕事をやめた。そして、これまで^{せわ}お世話になった人々に^{ひとびと おんがえ}恩返しをしようと
おも^{おも}思^{おも}って、ボランティア^{かつどう}活動^{はじ}を始めた。尾^お島^{ぼた}さんがボランティア^おをするときは、食^た
べるものも、寝^ねるところも、すべて^{じぶん}自分で^{じゅんび}準備^{ちい}する。小さな^{ちい}自分の^{じぶん}車^{くるま}に5日分^{かぶん}
の食^たべ物^{もの}を積^つんでボランティア^{ひつよう}が必要な^{ばしょ}場所^かに駆^かけつ^かける。それが、尾^お島^{ぼた}さんの
スタイルだ。

尾^お島^{ぼた}さんが男^{おとこ}の子^こを見^みつけた日^ひ、男^{おとこ}の子^この家族^{かぞく}が尾^お島^{ぼた}さんを家^{うち}に招^{しょう}待^{たい}して、
しよく^{しよく}じ^じ食^じ事^じをごちそうしようとした。尾^お島^{ぼた}さんが山^{やま}で男^{おとこ}の子^こを探^{さが}しているときに服^{ふく}
が汚^{よご}れたので、お風^{ふう}呂^ろにも入^{はい}ってもらいたかった。しかし尾^お島^{ぼた}さんは、
「私^{わたし}はボラン^{ぜん}ティア^ぶだから、そういうものは全部^{ぜんぶ}いりません」
と^い言^いって、食^{しよく}事^じも、お風^{ふう}呂^ろに入^{はい}ることも断^{ことわ}った。そして、自分^{じぶん}で持^もって^{つめ}きた冷^{つめ}
たいご飯^{はん}を食^たべて、小^{ちい}さな車^{くるま}に^の乗^{かえ}って^い帰^いって^い行^いった。

(874^じ字)

(2020.5 Written by Toru YOSHIKAWA)



この作品^{きくひん}はク^{ひよう}リエイ^じティブ・コ^{ひえい}モンズ^り 表^{けい}示^し - 非^{こく}営^{さい}利^{かい} - 継^も承^と 4.0 国^も際^と ライ^{てい}セン^{きよう}スの下^{もと}に提^{てい}供^{きよう}されています。この
作品^{きくひん}を利用^{りよう}する場^{ばい}合^あは、「たどくのひろば」を^{しゅつてん}出^{しめ}典^{てん}として示^{しめ}してください。

例^{れい}) 出^{しゅつてん}典^{てん}: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use
this work, please indicate the source as in the example above.